

2023年度ミッション・マネジメント研究部会 第2回研究会

# お寺に学ぶ博物館運営

令和5年2月のJR東海新幹線の機関誌のウェッジ（3月号）が「多死社会を生きる」というテーマの特集を組んでおり、その中の、人口減少で寺院消滅の危機「地域に開く」役割を取り戻せ、というタイトルで記された文章の中に、寺院や僧侶のこれからの在り方が、博物館や学芸員の在り方と重なって見えた。例えば、寺（博物館）は、金儲けを目的とせず、地域の人に喜んでもらいたい、「寺院（博物館）規模を上手に縮小していく事が大事」「僧侶（学芸員）は職業でない、僧侶（学芸員）は生き方そのものだ」と読み替えると納得できる内容であった。その他にも「多死社会」の到来に備えるべきキーワードが満載であった。人口減少に向けて寺の経営は切羽詰まった状況にあり、生き残りをかけた寺院の経営から博物館の在り方を学ぶことが多いと思い「お寺に学ぶ博物館運営」というテーマで研究会を開催する。

■日 時：令和5年12月21日（木） 13:00～17:00

■場 所：龍岸寺（京都市下京区塩小路通大宮東入八条坊門町564）

<https://ryuganji.jp/>

■定 員：最大50名（非学会員も参加可能）（床に座布団、座椅子利用となります）

■参加料：無料 申し込み先着順（学会員優先ではありません）

## ■プログラム：

13：00～13：05 開催挨拶、趣旨説明 高田浩二（海と博物館研究所）

13：05～13：20 参加者相互のチェックイン（自己紹介と参加の動機、15秒リレー）

13：20～13：05 基調講演「伝統とは絶えざる革新なり～ドローン仏、発祥の地の挑戦～」  
池口龍法 氏（浄土宗 三哲山龍岸寺 住職）

14：05～14：50 事例報告「神社仏閣の博物館的役割を担う仏像宝物の公開収蔵技術と現代  
社会における活用・還元」

西河今日子 氏（株式会社クマヒラ 文化財設備部 課長代理）

14：50～15：20 事例報告「伝統的文化を活かして未来の市場経済をつくる～展示、生態系  
管理、伝統工芸そして社会資本管理～」

三橋弘宗 氏（兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員）

15：20～15：30 休憩

15：30～16：30 パネルディスカッション

進 行 高田浩二

パネラー 池口氏 西河氏 三橋氏

16：30～16：55 会場との意見交換 質疑応答

16：55～17：00 まとめと閉会挨拶

■参加申込：日本ミュージアム・マネジメント学会事務局までメールまたはHPのフォームよりお願いします。

日本ミュージアム・マネジメント学会事務局

メール [kanri@jmma-net.org](mailto:kanri@jmma-net.org)

HP参加申込みフォーム <https://www.jmma-net.org/research>

（フォームのお申込みでは研究会名は「12/21ミッション研究部会」を選択してください）

■申し込み締切日時：2023年12月15日（金）

## ■基調講演「伝統とは絶えざる革新なり～ドローン仏、発祥の地の挑戦～」

池口龍法氏（浄土宗 三哲山龍岸寺 住職）

「家」への帰属意識が希薄になった現代において、檀家が菩提寺を支える「檀家制度」はもうかつてのように強固に機能しない。「檀家離れ」「墓じまい」は不可避で、寺院経営は困難な局面を迎えている。

しかし、人間はやがて老いて死にゆくから、供養の場が求められることは変わらない。さらにいえば、「家」への帰属意識が失われたとき、代わりに精神的支柱を人々が求めることも間違いない。したがって、現代にも未来にも、神仏を祀る場の存在意義は変わらない。ただし、革新を恐れないかぎりにおいてであるが。

龍岸寺では、個人でも契約できる永代供養墓の建立など、供養の仕組みの革新に取り組む。あわせて、お寺アイドルをプロデュースしたり、ドローンに載せた仏像によって極楽からの来迎を表現したりするなど、忘れられないお寺体験を届けられるよう創意を重ねている。

批判を恐れず、組織の持つ理念を追求し続ける試みが、博物館運営にいささかの示唆となるなら幸いである。

## ■事例報告

「神社仏閣の博物館的役割を担う仏像宝物の公開収蔵技術と現代社会における活用・還元」

西河今日子氏（株式会社クマヒラ 文化財設備部 課長代理）

神社仏閣が所蔵する文化財は祖先が残してくれた貴重な文化遺産であるが、火災・地震・水害・盗難による損傷紛失、虫・カビ・汚染空気などによる汚損・腐食など、常に危険にさらされている。株式会社クマヒラはこれらの危険から所蔵品を守る文化財保存設備の製作を40年来にわたって行っており、近年は収蔵庫のみならずケースなど展示分野にも業務を展開している。本発表では、仏像宝物を収蔵しながら展示する“公開収蔵庫”など、単なる収蔵保管に留まらず広く一般に公開している事例をその技術の一端とともに報告する。またお寺離れが言われて久しい昨今、信者や檀家だけではなく幅広い人々の支援を募るためのクラウドファンディングやサテライト施設の設置など、現代ならではの手段によって行っている仏像宝物の活用・社会への還元の在り方についても合わせて紹介したい。

## ■事例報告

「伝統的文化を活かして未来の市場経済をつくる～展示、生態系管理、伝統工芸そして社会資本管理～」

三橋弘宗氏（兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員）

2023年4月に改正施行された博物館法には「文化芸術基本法」が追加され、博物館活動において我が国の伝統文化や歴史的建造物活用への期待が高まっている。それに先駆け2018年に、国内各地の自然史博物館が協力し、歴史的建造物がもつ空間の趣と自然史標本のもつ美しさを融合させ、日本の自然と文化の関わりを伝える展示会を京都市の「龍岸寺」を舞台に、仏教と自然との関わりをテーマにした企画展を開催した。展示では仏教とゆかりのある動植物や祭礼で利用される自然由来のもの、建物やお墓で利用されてきた岩石、動植物の進化の歴史、日本最古の天球儀などが展示された。この展示を通じて、仏教の自然観と自然科学の原理の符合など、人類が自然と共生していく視点や、長らく地域コミュニティの核の一つであり、町人の子弟に読み書きそろばんを教える学校の役割もあった寺から学んだ知見を紹介すると同時に、伝統的な文化や工芸には、縮小社会で生き残るための小規模多機能技術が集約されている。こうした知見をもとに、展示会だけでなく、外来生物対策や自然再生事業への展開、茅葺職人とのコラボ、インフラメンテナンスなどの収益事業による市場開拓などの事例を紹介し、博物館が駆動する未来の市場経済の展望を解説する。